目次

[はじめに 6](#_Toc485643847)

[【理論編】 17](#_Toc485643848)

[1章　翻訳の前提 19](#_Toc485643849)

[1. 言語・思考・認識 19](#_Toc485643850)

[言葉のレンズをとおして世界を認識する 19](#_Toc485643851)

[「モノ」と「コト」 21](#_Toc485643852)

[天の視点・人の視点 21](#_Toc485643853)

[2章　翻訳の基盤 23](#_Toc485643854)

[1. 翻訳の基盤 23](#_Toc485643855)

[翻訳「術」「論」でなく翻訳「観」が考察の出発点 23](#_Toc485643856)

[「言葉の変換」という翻訳観 23](#_Toc485643857)

[2. 心の翻訳モデルの翻訳観 24](#_Toc485643858)

[言葉ではなく人間を中心に据えた翻訳観 24](#_Toc485643859)

[実践につながってこそ翻訳研究 24](#_Toc485643860)

[効率性や簡便性はほどほどに 24](#_Toc485643861)

[心に響く翻訳文を 24](#_Toc485643862)

[3. 心の翻訳モデルの翻訳の前提 26](#_Toc485643863)

[■前提1 完全な翻訳はあり得ない。訳文は翻訳者によって異なる 26](#_Toc485643864)

[■前提2 翻訳は原文に忠実かどうかでなく、生み出した価値の大きさで評価する 26](#_Toc485643865)

[■前提3 言葉ではなく「思考」（心の働き）を翻訳する。 27](#_Toc485643866)

[■前提4 「思考の基本単位」を翻訳の基本単位とする 27](#_Toc485643867)

[■前提5 テキストを全体として翻訳する 27](#_Toc485643868)

[■前提6 英日翻訳と日英翻訳に同じ手法を用いる 27](#_Toc485643869)

[4. 翻訳の規律 28](#_Toc485643870)

[■規律1 わかっていないことは訳してはいけない 28](#_Toc485643871)

[■規律2 おかしな文章は書いてはいけない 29](#_Toc485643872)

[理想と現実のはざまで 29](#_Toc485643873)

[3章 心の翻訳モデル 31](#_Toc485643874)

[1. なぜ翻訳「モデル」か 31](#_Toc485643875)

[2. 「英文和訳モデル」 32](#_Toc485643876)

[3. 「英文和訳＋編集」モデル 33](#_Toc485643877)

[英文和訳モデルでは本当に駄目なのか 33](#_Toc485643878)

[和文英訳モデルはこれまで存在しなかった 34](#_Toc485643879)

[新たな翻訳モデルへ 35](#_Toc485643880)

[4. 心の翻訳モデルとは 36](#_Toc485643881)

[「ゲーム・チェンジャー」としての心の翻訳モデル 36](#_Toc485643882)

[心の翻訳モデルでの翻訳対象は言葉ではなく思考（心の働き） 36](#_Toc485643883)

[心の翻訳モデルの全体図 36](#_Toc485643884)

[5. 社会的要請 38](#_Toc485643885)

[6. 個人的要請 41](#_Toc485643886)

[7. 思考（命題） 42](#_Toc485643887)

[思考の基本単位、思考の複合単位 42](#_Toc485643888)

[英語の思考と言語としてのかたち――Subject-PredicateとModifier 42](#_Toc485643889)

[8. 情報構造 51](#_Toc485643890)

[1. トピック・コメント 51](#_Toc485643891)

[2. 旧情報と新情報 57](#_Toc485643892)

[3．情報の焦点化 64](#_Toc485643893)

[4. 情報の重さ 68](#_Toc485643894)

[5. 情報の流れ 71](#_Toc485643895)

[9. 情意 77](#_Toc485643896)

[「情意」とは 77](#_Toc485643897)

[情意表現の位置 78](#_Toc485643898)

[情意表現に対する嗜好性の日英の違い 78](#_Toc485643899)

[「情意」の訳出の原則と手法 80](#_Toc485643900)

[10. 文体 88](#_Toc485643901)

[「文体」の翻訳は可能か 88](#_Toc485643902)

[「文体」をいかに翻訳するべきか 89](#_Toc485643903)

[「文章構造」の翻訳 94](#_Toc485643904)

[11. 「創発」として翻訳 98](#_Toc485643905)

[分析から抜け出る怖さと勇気 98](#_Toc485643906)

[翻訳の将来 100](#_Toc485643907)

[英日翻訳の役割の変化 100](#_Toc485643908)

[英日翻訳依存からの脱却 100](#_Toc485643909)

[粗製濫造から高品質少量製造へ 100](#_Toc485643910)

[直訳から創作的翻訳へ 101](#_Toc485643911)

[日英翻訳の重要性の高まり 101](#_Toc485643912)

[これからの翻訳者に求められる能力 101](#_Toc485643913)

[【技法編】 103](#_Toc485643914)

[ラブレター 105](#_Toc485643915)

[1章　技法を学ぶ前に 111](#_Toc485643916)

[1. 英文和訳/和文英訳を捨て去る 111](#_Toc485643917)

[2. なぜ技法の学習が必要か 111](#_Toc485643918)

[1. 翻訳における「暗黙知」の「形式知」化 111](#_Toc485643919)

[2. 翻訳実践力の改善 112](#_Toc485643920)

[2章　思考の単位ごとの訳出 113](#_Toc485643921)

[1. 思考の単位ごとに訳す 113](#_Toc485643922)

[3章 言い換え処理 121](#_Toc485643923)

[1. モノ・コト変換 121](#_Toc485643924)

[名詞化はずし 121](#_Toc485643925)

[2. 原文の構文変更 127](#_Toc485643926)

[4章 トピック処理 129](#_Toc485643927)

[1. 「主述」から「題述」へ 129](#_Toc485643928)

[2. 主題（トピック）表現の処理 130](#_Toc485643929)

[5章 名詞認識の訳出 134](#_Toc485643930)

[1. 英語の三層認識から日本語の単層認識へ 134](#_Toc485643931)

[6章 代名詞認識の訳出 139](#_Toc485643932)

[1. 英語での代名詞 139](#_Toc485643933)

[2. 日本語に代名詞はない 139](#_Toc485643934)

[3. 省略、還元 139](#_Toc485643935)

[7章 指示認識の訳出 143](#_Toc485643936)

[1. 英日の指示詞認識の違い 143](#_Toc485643937)

[8章 動詞認識の訳出―助動詞 146](#_Toc485643938)

[1. 日英の助動詞 146](#_Toc485643939)

[2. 助動詞の客観性と主観性 146](#_Toc485643940)

[9章 動詞認識の訳出―完了形 150](#_Toc485643941)

[1. コトをhaveする 150](#_Toc485643942)

[2. コトがbeである 150](#_Toc485643943)

[10章 動詞認識の訳出―進行形 153](#_Toc485643944)

[1. 動的なイメージ 153](#_Toc485643945)

[11章 動詞認識の訳出―受動態 156](#_Toc485643946)

[受動態を使う思考・認識 156](#_Toc485643947)

[受動態と「れる・られる」 157](#_Toc485643948)

[12章 動詞認識の訳出―過去形・現在形 160](#_Toc485643949)

[現在形と「～である／だ、～る、」 160](#_Toc485643950)

[過去形と「～た」 161](#_Toc485643951)

[13章 否定認識の訳出 164](#_Toc485643952)

[1. 日本語思考と英語思考での否定の位置の違い 164](#_Toc485643953)

[日本語思考では何かを述べてからそれを否定する 164](#_Toc485643954)

[英語思考ではまず否定をしてから何かを述べる 164](#_Toc485643955)

[not…と「～ない」 164](#_Toc485643956)

[日本語思考には名詞の否定は存在しない 166](#_Toc485643957)

[14章 テキスト構造の訳出 167](#_Toc485643958)

[つなぎ表現を利用する 169](#_Toc485643959)

[図解を利用する 172](#_Toc485643960)

[15章 無駄を省く 176](#_Toc485643961)

[1. 文章ダイエット 176](#_Toc485643962)

[表現をシンプルにする 177](#_Toc485643963)

[文を書き換える 178](#_Toc485643964)

[省略できる要素 178](#_Toc485643965)

[複合漢語の利用 179](#_Toc485643966)

[第2部 日英翻訳の技法 181](#_Toc485643967)

[1章　ネイティブ英語と国際英語 183](#_Toc485643968)

[日英翻訳の前提――優れた国際英語が書けること 183](#_Toc485643969)

[ネイティブ英語支配の英語観 183](#_Toc485643970)

[国際英語/ネイティブ英語並存の英語観 184](#_Toc485643971)

[ネイティブ英語と国際英語の違い 184](#_Toc485643972)

[命題・情報構造・情意ではなく、おもに文体に違いが現れる。 185](#_Toc485643973)

[国際英語の使用領域 185](#_Toc485643974)

[国際英語の基準 185](#_Toc485643975)

[国際英語による日英翻訳 186](#_Toc485643976)

[社会的要請に応じた国際英語の分類 186](#_Toc485643977)

[2章　英作文の基礎 187](#_Toc485643978)

[英作文力なくして翻訳なし 187](#_Toc485643979)

[英語が書けなければ英日翻訳もできない 187](#_Toc485643980)

[国際英語として書く 188](#_Toc485643981)

[自分が書いた英文の評価基準を持つこと 189](#_Toc485643982)

[3章　手順を決める 190](#_Toc485643983)

[日英翻訳の3つの壁 190](#_Toc485643984)

[手順どおりに処理する 190](#_Toc485643985)

[4章 思考を翻訳する―分割する 192](#_Toc485643986)

[1. 原文日本語を「思考の基本単位」に分割する 192](#_Toc485643987)

[2.「思考の基本単位」ごとに訳す 193](#_Toc485643988)

[3.「思考の基本単位」の訳文を並べる 194](#_Toc485643989)

[4. 話し言葉は思考の基本単位ごとの訳出で十分 197](#_Toc485643990)

[5章 思考を翻訳する―統合する(1) 198](#_Toc485643991)

[1. 書き言葉は思考の基本単位ごとの訳出では不十分 198](#_Toc485643992)

[2. S-P+Modifierのかたちにまとめる 198](#_Toc485643993)

[サブコメントのModifier化 198](#_Toc485643994)

[原文を言い換える 199](#_Toc485643995)

[S-PとModifierを取り換える 200](#_Toc485643996)

[「中央銀行は内部規定でA格以下の国債は保有できないところが多い。」 201](#_Toc485643997)

[6章 思考を翻訳する―統合する(2) 202](#_Toc485643998)

[1. 思考をさらにまとめる 202](#_Toc485643999)

[S-P+複数のM 203](#_Toc485644000)

[2. 名詞化を利用する 203](#_Toc485644001)

[形容詞化 205](#_Toc485644002)

[名詞化の濫用には注意 206](#_Toc485644003)

[7章 情報構造を翻訳する 207](#_Toc485644004)

[1. トピック・コメントの訳出技法 207](#_Toc485644005)

[「～は」を自動的にSubjectとはしない 207](#_Toc485644006)

[2. 旧情報と新情報の訳出技法 208](#_Toc485644007)

[旧情報のさまざまな言い換え 208](#_Toc485644008)

[代名詞ではなくtheプラス新情報のかたちを用いる 209](#_Toc485644009)

[3. 情報の焦点 211](#_Toc485644010)

[日本語と英語の情報の焦点をいかに合わせるか 211](#_Toc485644011)

[4. 情報の重さ 213](#_Toc485644012)

[情報の焦点や重さの訳出は訳文からはわからない 213](#_Toc485644013)

[5. 情報の流れ（フロー） 214](#_Toc485644014)

[8章 Subject決めのいろいろ 216](#_Toc485644015)

[1. Subjectは英語センテンスの太陽 216](#_Toc485644016)

[英会話は「オレオレ」会話 216](#_Toc485644017)

[英語ライティングに「オレオレ」は禁物 216](#_Toc485644018)

[Subject決めは日英翻訳での最大のポイント 217](#_Toc485644019)

[2. いかにSubjectを決めるか 218](#_Toc485644020)

[「～が」「～は」の部分だけをSubjectとするのは間違い 218](#_Toc485644021)

[独立文をSubject化する 218](#_Toc485644022)

[「連用中止法」をSubject化する 220](#_Toc485644023)

[接続助詞他をSubject化する 221](#_Toc485644024)

[9章 情意を翻訳する 228](#_Toc485644025)

[1. 副詞的な情意認識の訳出 228](#_Toc485644026)

[訳さないほうがよいケースに注意 228](#_Toc485644027)

[2. 文末での情意認識の訳出 228](#_Toc485644028)

[10章 文体を翻訳する 239](#_Toc485644029)

[1. 平明体が基本 239](#_Toc485644030)

[2. 社会的要請と文体 240](#_Toc485644031)

[法律社会は平明体を受け入れない 240](#_Toc485644032)

[特殊な要請は専門書でカバー 240](#_Toc485644033)

[11章 テキスト構造を訳す 241](#_Toc485644034)

[1. テキスト構造の本質的差異をいかに乗り越えるか 241](#_Toc485644035)

[日英翻訳でのテキスト構造の訳出は非常に難しい 241](#_Toc485644036)

[2. 主題ごとのパラグラフ化 243](#_Toc485644037)

[最初から「段落」がひとつの主題としてまとまっているケース 244](#_Toc485644038)

[3. 情報のつながりの整備 246](#_Toc485644039)